



Cornell University

2021年6月 馬淵祐太

船井情報科学振興財団 第9回報告書

Cornell University、Department of Neurobiology and Behavior に所属し、神経科学を専攻しています。とうとうPh.D5年目が始まろうとしています。卒業の時期に関しては指導教官と徐々に話し始めた段階で、具体的な時期はまだ決まっていませんが、5年目という区切りの学年を迎えるにあたって、気を引き締めようと思います。一方アメリカでは、COVID-19のワクチン接種拡大に伴い、大学内外で、さまざまな規制が変更され、少しずつ以前のような生活に戻りつつあるように感じています。

1. 日常生活について

Ph.D5年目にもなると、日常生活に特に大きな変化はなく、自宅と研究室の往復を繰り返す日々を送っています。前回の報告書に書きましたが、昨年車を購入したので、移動が快適になったことが一番の変化である気がします。イサカのような田舎でも、車を持たずにバスを使って生活することは可能ではありますが、車のおかげでQOLがかなり上がったことを実感しています。

上述のように、アメリカではワクチンの接種が進んでいることに伴って、病院などの特定の場所を除いて、マスクの着用義務が撤廃されました。これにより、ワクチンを接種済みの人に限り、Cornellでも6月1日を以って学内でのマスクの着用が不要となりました。それまではほぼ100%の人がマスクを着けていましたが、6月になった途端、大学の建物の内外でマスクをしている人を見かけることは減多なくなりました。これは大学に限ったことではなく、街中やスーパーでもマスクをしている人の数はかなり減りました。大学から車で帰宅する途中に通るDowntownも、金曜日や土曜日の夜になるとレストランやバーに行く人でごった返しています。

また学期中は、大学院生は大学が提供するウェブページを通じて毎日健康状態を報告し、週に一回のCOVID-19の検査が義務付けられていましたが、ワクチンを接種済みの学生や教員はこれらの義務からも解放されました。身体的、あるいは宗教的な理由でCOVID-19のワクチンを打てない人を除いて、Cornellでは来学期以降、すべての学生がワクチンを接種することを要求しており、基本的にすべての授業を対面式に戻すことを計画しているようです。世界的にはパンデミックが収まったと言える状況ではないですが、Cornellを含めアメリカでは、社会活動を可能な限り元通りにし、経済を回す方向に舵を切っているように思います。

2. 研究生活について

ワクチンの接種率の上昇に伴って、大学で研究を行う際に、部屋ごとに割り当てられていた許容人数の制限が解除されたので、現在は不自由なく実験をすることができています。

前回の報告書で、論文を仕上げる段階に近づいてきた、という旨の文章を書きましたが、最後のまとめの実験で大きな問題が生じてしまい、そのトラブルシューティングにかなりの時間を費やしてしまいました。もうすぐで終わりだと思っていたところで直面したトラブルだったので、精神的

な切り替えをするのに少し時間を要しましたが、別の角度から新しい実験をしたことで、予想外の面白い結果を得ることができました。抽象的なことばかり書いて、具体的に何をやったのかは全く書いてないので恐縮ですが、なるべく早く論文にまとめて研究結果について紹介できればと思います。

3. 最後に

最後になりましたが、常日頃よりご支援頂いている船井情報科学振興財団に感謝致します。